

〈翻 訳〉

『パスカルの「パンセ」』*
弁証論のテーマ（2）**M. ルゲルン、M. =R. ルゲルン著
古 家 曜 子*** 共訳
森 川 甫****

気晴らし

パスカルの独創性は、伝統的なテーマの変質に最もよく現れるのであるが、気晴らしのテーマは、少なくとも、この語がここで表す意味においては、まったく新しい。確かに、これまでも、教化・宗教文学が気晴らしの善用と悪用を論じてきた。聖フランソワ・ド・サルは、その著『献身生活序説』の優れた記述のうちの数ページを割いてこれを論じている。しかし、彼の著作で取りあげられている気晴らしは、いわゆる気晴らし、すなわち、この語が指し示すさまざまな活動であって、人間に自分の条件を考えさせないよう機能する気晴らしではない。しかも、パスカルはここではモラリストとして振る舞わない。権威によるにせよ説得に基づくにせよ、なんらかの出来合いの規範のものさしで行動を非難したりはしないのである。彼はあくまで調書を作成するにとどまる。これは、依然として、人類学者の手法である。

考察の出発点は、おそらく、気晴らしを非難するモラリストの態度にきわめて近いといえよう。

時として、人間が引き起こすさまざまな騒動、宮廷や戦場で、人びとが危険や苦痛に身をさらす（こうして多くの争いごとや情念、大胆にして大抵は邪悪な企てが生まれる）のをじっくり観察するにつけ、私は、人間のすべての不幸は、部屋で休んでばかりいられないという、ただひとつのことから生じるとよ

く言ってきた。(L. 136)

これだと、パスカルは、無駄と思えるすべての外的な活動を止めるよう勧めているかのような印象を持つかもしれない。実際はそうではない。彼は分析をもっと先まで押し進め、その正から反への反転の手法を駆使して、次のことを確認するに至るのである。

しかし、もっと仔細に考え、われわれの不幸の原因を見いだしてからは、その理由を知りたいと思ってきたが、私は十分現実的な理由を見いだした。それは、われわれの弱く、死を免れ難いという条件、われわれがこの条件についてじっくり考えるや、なにもものもわれわれを慰めることはできないようなかくも悲惨な条件から必然的に生じる不幸にある。(L. 136)

論証を最大限強力にするために、パスカルはここでは王位をその究極の例として取りあげる。王自身も気晴らしなしにはいられないからである。

気晴らしと呼ばれるものがなければ、王は不幸である。賭事をし、気晴らしのできる家来のうちでもっとも身分の低い者よりもっと不幸である。

したがって、気晴らしが必要なのは、社会的身分が低いことや何らかの偶然的な不幸を忘れたいと

*キーワード：『パンセ』の主題、人間存在の不条理、神学的認識。

**これは M. et M. =R. Le Guern, *Les Pensées de Pascal de l'anthropologie à la théologie*, Larousse の 4. Les thèmes de l'apologie, pp. 113-147. の翻訳である。

***関西学院大学兼任講師

****関西学院大学社会学部教授

ということとは関係がない。別の断章で、彼はこのテーマを十分展開する。

王の権威はそれだけで相当に大きいので、それを持っている者にとっては、自分のありのままの姿を見るだけで、幸福になれるものである。王も、庶民のように、これを考えることから目をそらさねばならないのだろうか？ 家政の悲惨から目をそらし、上手に踊ることで頭をいっぱいになれば、ひとは幸福になれるものだというのを私は知っている。しかし、王の場合も同じであろうか？ 自分の偉大さと向き合うのではなく、こんな空しい楽しみ事に熱中したほうが、もっと幸福になれるのであろうか？…このことを証明してみよう。なんらの感覚的満足も精神の緊張もなく、取り巻きもなし、気晴らしもなしに、王にゆっくりとあらゆることをたったひとりで考えさせてみよう。すると、王も気晴らしがなければ、不幸でいっぱいのひとりの人間にすぎないことがわかるであろう。…(L. 137)

「どんな王も、自分のありのままの姿のことを考えると、不幸である。」したがって、気晴らしの探求は、必然的に、人間の本性に関係する。一見すると、大多数の気晴らしほど非合理的なものはない。が、実際は、これほど合理的でこれほど人間の本性に適うものはないのである。「これについて哲学者を気取る者、世間の人たちがウサギを買いたいとは思わず、そのあとを追いかけて、まる一日過ごしたりするのは常識はずれだと考える人たちは、われわれの本性を知らないのである。」気晴らしは幸福の探求と関係がある。それは、消極的だが、人間に自分の条件の不幸をしばし忘れさせてくれる限りにおいて、ある種現実的な幸福なのである。だから、気晴らしのテーマは『相矛盾するもの』や正から反への反転といった、より一般的なテーマに含まれる。

「もし人間が幸福なら、聖人や神のように、気晴らしなんぞしなくても幸福であろう。」
「そのとおりだ。だが、気晴らしで楽しむというのも幸福ではないのか？」「いや違う。気晴らしというのは、よそから、外から

やって来るものだから、自立的とはいえず、さまざまな出来事の影響を受けやすいし、悲しみも避けられない。」(L. 132)

人間に特徴的なあらゆる矛盾と同様、このような矛盾も人間のうちに2つの本性、神の創造した本性と原罪によって墮落した本性が共存していることによってしか説明できない。

彼らには、気晴らしや活動を外に求めようとする、自分たちの絶え間ない不幸を恨む気持ちから生まれるひそかな本能がある。しかし、また、最初の本性の名残のもうひとつの本能があって、幸福は本当は忙しく動きまわることにはなく、休息のなかにこそあるということを彼らに教えるのである。この2つの相反する本能から、彼らのなかにひとつの混乱した道筋が形づくられる。これは、魂の奥の、彼らには見えないところに隠されており、騒動を経て休息をめざすように彼らを誘うものである。(L. 136)

気晴らしのテーマは空しさのテーマと関連する。人間が自分の条件から目をそらすために行う活動はすべて空しいからである。しかも、あらゆる人間の活動を、気晴らしを目的とするものか他人の目に自分を実際よりもよく見せることを目的とするものかに分けることはきわめて難しい。気晴らしと倦怠の関連は一層はっきりしている。

こんな風に一生が過ぎていく。われわれはいくつかの障害に立ち向かいつつ、休息を求める。障害を克服してしまうと、今度は休息が生み出す倦怠に耐えられなくなる。休息を出て、また騒乱を求めずにはいられない。われわれは、自分の持つ不幸を考えるか、われわれに押し寄せてくる不幸を考えるかしかできないからである。しかも、自分が完全に保護されていることが十分わかっている、倦怠が、必ず、独自の権威を帯びて、その本来の根のある心の底から現れ出でて、精神をその害毒で満たすのである。(L. 136)

結局、倦怠からの逃避は幸福追求の別の側面にすぎない。これは『最高善』の綴りの重要な主題であり、個々の矛盾を取りあげている分類済み綴りのこの部分では、『気晴らし』に関する考察と『最高善』に関する考察の間に『哲学者』という題の綴りがある。

哲学者

この綴りに集められた断章は、哲学者全体に関するものではなく、ストア派の哲学者に重点がある。パスカルが「ストア派」だけに哲学者の資格を認めているからではない。ピュロン派、独断論者、アカデメイア派の3つに分けて教説史を説くモンテーニュから、パスカルがその全体像を拝借したせいである。にもかかわらず、対句を多用する傾向や二元論的対立への好みもあって、パスカルにとっては、哲学には、ひとつはピュロン派とエピクロス派、もうひとつは独断論者とストア派という二つの流れ、2つの極しか存在しないのではないかとの印象を受ける。この二分傾向は、彼がエピクテートスとモンテーニュについて書いた『ド・サシ氏との対話』において特に顕著である。「われわれはこの2つの道のどちらかしか辿ることはできない。」

パスカルが『哲学者』の綴りで、ストア派しか取りあげていないのは、パスカルの同時代人にとっては、エピクテートスの教義がもっとも高尚で、もっともキリスト教に近く思えたからである。キリスト教ストア主義の信奉者にとっては、ストア派哲学とキリスト教は完全に両立しうる。パスカルはこの2つが矛盾していること、ストア派には人間の持つ「相矛盾するもの」の典型的な現れである内部矛盾のあることを示そうとした。

自分を知らないひとに向かって、お前は自力で神に到達できると大声でわめくとは、ご苦労なことだ。自分を知っているひとに向かってそう言うこともだ。(L. 141)

ストア派は、その手段も示さずに、人間は神に到達できると言う点で、矛盾している。人間は自力では神に到達しえない。だから、パスカルは次の

ように言うのだ。「ストア派の言うことはほとんど実行不可能で、しかも荒唐無稽である。」(L. 144) この矛盾を解決しうるものはキリスト教をおいて他にはない。

エピクテートスにはその道がはっきり見えていたにちがいない。彼は人間にこう言うのだから。「お前たちは道を間違えている」と。正しい道はほかにあることを示しながら、そこへ導いてはくれない。それは神のみ心を旨とする道である。イエス・キリストだけがそこへ連れて行ってくださる。「道、真理」(L. 140)

こうした哲学者たちの振る舞いそのものが、その信念や教えと矛盾している。

彼らは、神だけが愛され、崇められるに値すると信じていながら、彼ら自身が人間たちから愛され、崇められることを願っている。彼らには自分たちの墮落ぶりが見えないのだ。(L. 142)

かくして、哲学者の生も普通の人たちの生と同じように空しい。別のところで、パスカルは次のように記す。「あらゆる立場の空しさを示すために、一般の人たちの生の空しさを示し、次いで、ピュロン派やストア派の哲学的生の空しさを示すこと。」(L. 694) ストア派哲学者の行動は、「彼らには自分たちの墮落ぶりが見えない」としても、この墮落をもってしか説明し得ない。それは、哲学者たちには人間そのものが抱える矛盾が見えないからである。だから、人間に気晴らしをやめさせようという空しい努力をし続けてきたのだ。

われわれは、自分を外へ外へと向かわせるものをたくさん持っている…

だから、哲学者たちがこんなことを言っても無駄なのだ。「自分自身に立ち返りなさい。自分のなかにこそ幸福が見つかるのだ。」だれも哲学者など信じない。彼らの言うことをまとも取るひとは、空っぽの大馬鹿者だ。

(L. 143)

人間の本性のあらゆる『相矛盾するもの』同様、哲学者の誤りも、原罪すなわち情欲の結果として説明しうる。

3つの情欲が3つの分派を生んだ。哲学者たちはただ、これら3つの情欲のひとつに従うたにすぎない。(L. 145)

libido sentiendi (肉欲) がエピクロス派とピュロン派を生み、libido sciendi (知識欲) がアカデミア派を、libido dominandi (支配欲) がストア派を作り出した。こうしてパスカルは、アウグスチヌスの3つの情欲のテーマを哲学者の検証にまで広げる。

最高善

常套句になるまで使い古されたテーマといえ、『最高善』のテーマがそれである。人間ならだれでも幸福の追求は変わらぬ関心事のひとつであるから、啓示へと向かう人間の研究の一部をこれに割くのは当然である。ここにもまた、モンテーニュと、クレルスリエ Clerselier によって1657年に出版された『書簡集』第1巻中のクリスチナ女王とエリザベート王女宛の手紙で「最高善」を論じているデカルトの影がちらつく。しかし、いまパスカルの念頭にあるのは、なんといっても聖アウグスチヌスである。パスカルは、アントワヌ・アルノー訳の『カトリック教会の習俗』のこの部分を読んでいるはずである。

それ故、人間がどう生きるべきかを理性によって求めよう。われわれはみな幸福になりたいと願っているのは確かである。この命題に賛成しないひとはいない。

最高善を実践するのであれば、だれも幸福にはなれないし、幸福でなければ、実践もおぼつかない。だから、われわれが幸福に生きたいと願うなら、おのおの最高善を保持する必要がある…

これが備えているべきもう1つの性質は、

自分の意に反してこれを失うことがないということだ。われわれにこれを保持したいという情熱はあっても、われわれが満足し得るようななんらかの善に立脚することはできないのである。(3章)

パスカルが、それだけで綴りの大半を占める長い断章148の出発点と到達点を定めたのは、まさにここである。

人間はみな幸福になりたいと願っている。それには例外はない。そのために違った手段を採るにしても、人間はみなこれをめざしている…

真の幸福は、だれもが同時に所有でき、減ることもなく、欲望をかきたてることもなく、自分の意に反して失うことのないものでなければならぬということを知った…

ストア派は、人間の幸福を人間自身のうちに置いた。しかし、自殺を勧め、自己矛盾に陥った。「彼らは矛盾している。結局は自殺を勧めるからである。ベストのように、解放されてはじめて幸せになれる人生なんて！」(L. 147) 断章148で、パスカルは、幸福の追求こそ「これから自殺しようかというひとも含めた、あらゆる人々のあらゆる行動の動機」であることに注目する。パスカルが自殺に言及した2回が2回とも、『最高善』の綴りである。こんな風に、正反対のものを結びつけようとするのは彼の気質である。パスカルは、相矛盾するものを結びつけることによって真理に到達しようとするのである。

この断章でのパスカルのアプローチの方法は、弁証論全体のその要約になっている点で特に興味深い。出発点の人間に関する2つの考察。「だれもが幸福を求めている。」「だれも(信仰なしには)幸福に到達できない。」人間が独力では解決できない矛盾が問題とされている。

長く続いた、同じような経験から、われわれは努力だけでは幸福に到達できないことを思い知ったはずだ。なのに、われわれは少しも経験から学ばなかった。この経験は完全に同

じとはいかず、わずかに違っていたため、われわれは、今度こそあの時のように裏切られることはないだろうという期待を抱くのである。

原罪のしるしである2つの本性を合わせもつ人間存在によってしか、この矛盾を説明することはできない。人間の条件の全くの人間的な考察から啓示による説明へと移行しつつ、ここの調子は、パスカルには珍しいことだが、2つの要素を用い、たずねかけるような動きと、叫びと深淵の激烈なイメージを駆使した豊かな文章によって、なお一層の叙情性に達している。

では、この無力、この渴望がわれわれに大声で知らせているのは、いったい何であろう。かつて人間は真の幸福を持っていたという以外にはありえない。が、今ではまったくうつろなその痕跡しか残っていない。なのに、人間はこの空白をその周辺にあるもので埋めようとして、今あるものから得られない助けを今はないものから得ようとしている。しかし、こんなことをしても無駄だ。この無限の深淵は、無限にして不変なる神ご自身によってしか満たされることはないからである。

人間の幸福は神にある。これこそ、原罪によって真の神から離れた人間が偽の神をでっち上げたことの説明になる。パスカルは、ひきつったような、悲壮感すら漂うユーモアをたたえて、情熱的に、これら偽の神を数えあげる。「星、天、地、元素、植物、キャベツ、葱、動物、昆虫、子牛、蛇、熱病、ペスト、戦争、飢饉、悪徳、不義、近親相姦」墮落し、神を離れた人間の幸福追求は、原罪に墜ちた際、その心を捉えた3つの情欲を通してなされる。

ある者は幸福を権力に求め、ある者は好奇心や学問に、またある者は快樂に求める。「権力」には、libido dominandi (支配欲) が認められる。「好奇心」や「学問」には libido sciendi (知識欲) が、「快樂」には libido sentiendi (肉欲) が認められる。3つの情欲のテーマから、パスカルはアウグスチヌスの伝統に立ち帰る。

人間描写によって、一連の人間の条件と行動における矛盾が確かめられた。パスカルは、すでに原罪による説明を行っている。人間の知恵はこれ以外の説明をすることはできない。人間学から神学への移行はごく自然に行われ、この2種類の考え方は混同されてはいない。それまで解決不能だった問題を、視点を変えることで解決可能にするのは、一種の認識論的飛躍である。それは「結果の理由」を追求する方法であり、視点を変えることで、相矛盾するものが両立するばかりか、「結果の理由」の完全な説明も可能になるのである。

学問的認識から神学的認識への移行

神学は、分類済み綴り第1部の人間描写の最後に、原罪の教義の表現で入ってくる。その結果、人間行動の矛盾が説明できる。しかし、この神学的説明という援助の手はごく限られている。落ちぶれ、いまや3つの情欲の奴隷となり下がってはいても、人間は自分の過去の偉大さを覚えている。パスカルが神学の基礎原理を持ち込むやり方は、純粹に神学的ではない。彼はこれを読者に提示するに当たって、この種のものに関しては唯一正統な方法である権威を振りかざしはしない。経験と推理にもとづき、学問的に論を展開してきたその結論として、彼はここに到達するのである。学問においては、こうした断言は仮説という形をとる。それは唯一納得のいく仮説である。したがって、独りよがりから確実だと推定することもある。しかし、学問には真の確実性があると言い切れない。それ故、読者を経験と推理が支配する認識の領域から神の権威に基づく神学的認識の領域へと移行させることによって、読者の姿勢を変化させるのがパスカルのねらいである。

弁証論の要となる分類済み綴り第2部の目的は以下の通りである。はじめの5つの綴りのうち、最初のもので『A. P. R.』と題されており、パスカルが弁証論に関しておこなったポール・ロワイヤルでの講演のために取られたノートであることはほぼ間違いない。2番目の綴りは『はじめ』と題されている。これは、前置きである人間論が終わったあとの本格的な弁証論の神学的部分の始ま

りを示している。パスカルは弁証論の所定の箇所
に「賭の論証」を加えるつもりだったと考える批
評家たちは、ここがそれだと言う。それこそ証明
不能の仮定とはいえ、ここがまさに弁証論の中心
点であるとのわれわれの印象を裏付けるものであ
る。次の『理性の服従と利用』と『この神の証明
が優れていること』は学問の観点から神学の観点
への移行を物語っている。5番目の綴りの題に
至っては、ずばり『人間から神への認識の移行』
となっている。

A P.R.

綴りを構成する唯一の長い断章 (L. 149) は、
1658年の春か秋、計画中の弁証論についてポール
・ロワイヤルでおこなった講演のために書かれ
た。ということは、この断章は、綴りの作成時、
つまり、すでに集めてあった資料の全体を一目で
見渡すことが出来る時期に書かれたことになる。
パスカルの思想に不可欠のテーマが集められたこ
の断章の総合的な性格にも納得がいくわけであ
る。

その出発点は、人間研究が到達した結論の繰り
返しである。「真の宗教は、当然、人間的探求の
結果得られた確信と両立しうるはずである。」

人間は、偉大であって悲惨であることがこん
なにも明白であるから、当然、宗教は、人間
には偉大さと悲惨の両方があるとわれわれに
教えるものでなければならない。

また、宗教は、われわれにこの驚くべき矛盾
の説明をしてくれなければならない。

こうして、弁証論の冒頭、人間の条件の検証に与
えられている重要な位置が正当化され、説明され
ている。同様に、人間の義務はよく知っていた
が、それを実行することはできなかったストア派
の哲学についての考察と、『最高善』に関する考
察がここで到達点を見いだした。ふたたび、真の
宗教の基準が問題にされているからである。

真の宗教は、人間を幸福にするために、ただ
ひとりの神が存在すること、われわれにはこ

の神を愛する努めがあること、われわれ人間
の真の幸福はこの神の懐のなかにあることで
あり、われわれの唯一の不幸はこの神から離
れることであると教えてくれるはずである。
また、真の宗教は、われわれの内に広がる闇
が、神を知り、神を愛せなくさせているこ
と、だから、われわれは、義務としては神を
愛すべきなのに、情欲のせいできれいできな
い、不正に満ちた存在であることを教えてく
れるはずである。真の宗教は、われわれが神
と自分自身の幸福に対して刃向かう理由を教
えてくれるはずである。真の宗教は、この無
力を癒す薬とこの薬を手に入れる手段を教え
てくれるはずである。

この基準にしたがって、哲学者たちの教義を検
討してみれば、それらが十分とはいえないこと
を認めざるをえない。ストア派やエピクロス派
(もともと、パスカルは後者をマホメット教徒
と同一視している) は、部分的な解決策しか
示さない。一方はわれわれを神に等しいもの
として、他方は人間はけものに等しいとする
。また、一方は、幸福はわれわれの内にある
といい、他方は、地上にしか快樂はないとい
う。パスカルがこの両方を否定するには、一
連の疑問を連ねるだけで充分である。誤謬
の対称的な列挙は、対称的な構成そのもの
によって一層効果的になる。随所にちりば
められた微妙な対句変換手法からして、パス
カルは、思い通りにレトリックの威力を発揮
することができたことが見て取れる。

われわれの内にある幸福が幸福のすべてだ
という哲学者はどうであろう。この人たちは
われわれの病を癒す薬を見いだしたであら
うか。人間は神に等しいというけれど、そ
れで人間の高慢が癒えたのであろうか。わ
れわれをけものに等しいとする者たち、来
世においてさえも、地上の快樂が幸福その
ものであるというマホメット教徒たちは、
われわれの情欲を癒す薬を与えてくれた
であらうか。

このような問題すべてを完全に解決するのは
キリスト教しかない。パスカルは人間の
下劣さを注視

するところから導き出される反論に答える。人間は墮落しきっているから、神とひとつになれないと言うかわりに、「実際、われわれは墮落しきっているから、神の慈愛によってわれわれが神にふさわしい者になれないかどうか、独力では知り得ない」ということを認めるべきである、と。全くプラトンのイメージを用いて、パスカルは人間の視線を神の方へと向けさせる。

それゆえ、人間が自分を取り巻く闇のなかに何かを見るなら、地上のものになんらかの愛の対象を見いだすのなら、さらに神が人間にご自分の本質を示す光を与えておられるとすれば、どうして、神のみ心になつたやり方で、人間が神を知り、神を愛することができないだろうか。

これは、擬人法によって、神の知恵がわれわれに人間の条件を説明しているのである。ここでの擬人法の援用は、修辭的な優雅さではなく、このやり方は、明らかに、聖書、それも『箴言』にヒントを得たものであろう。このやり方は、人間が独力では真理に到達することはできない、それを人間に与えるのは神ご自身であるということの証明にはふさわしい。パスカル描くところの人類の宿命描写は、単純さのなかに深さと驚くべき偉大さを秘めた短く、簡潔な文章を用い、聖書風の調子を帯びている。その完成度からして、擬人法のはじめはすばらしい散文詩になっている。

人間たちよ、人間から真理や慰めを期待してはならない、と神の知恵は言う。あなたがたを創ったのはわたしであるから、私だけがあなたがたが何者かであるかを教えることができる。しかし、あなたがたはもう私が創った時の状態にはない。私は、人間を神聖で、無垢で、完全な者として創り、光と知恵で満たし、私の栄光と大いなる力を教えた。そのとき人間は、神の威光をつぶさに見ることができた。そのとき人間は、目が見えなくなる闇の中にも、死すべき運命にも、苦悩に満ちた悲惨のなかにもいなかった。

こんな具合にパスカルが描くのは、彼自身がサン・シランの『やさしい神学』で読んだものに酷似した、雄大かつ簡潔な表現のキリスト教教義である。墮落の描写は、教理問答ではおなじみの問いと答えの形でそれを論じた、サン・シランのテキストにさらに一層類似している。

この罪を犯すとき、人間にはどんな意図があったのか？

——人間は、自分の条件を超えてさらに高く上り、神への服従を拒み、神のように自立したいと思った。

この罪はどんな結果をもたらしたか？

——この罪の結果は、人間の意図とは正反対のものであった。人間は、あらゆる被造物の最下位にまで低められた。罪によって、全被造物は人間に敵対し、人間は情念と悪魔の奴隷、肉体と魂とからなる永遠に死すべき存在となった。

では、人間はその王位を失ったのであろうか？

——その通りだ。家来全員が団結して人間に向かい、神を捨てた人間を見捨てたのだから。人間は単に自分ひとりだけの主人となったに留まらず、自分の全感覚、肉体と魂の全ての動きが理性に抗ったのである。(第三課、4-6)

これがパスカルの手にかかるところなる。

ところが、人間はこのあまりに大きな栄光に耐えきれず、高慢に陥った。人間は自分が自分の中心になろうとして、私の助けを振り切ろうとした。人間は私の支配下を逃れ、私に等しい者になり、自分自身の内に幸福を見いだしたいと思った。私は人間をなすがままにまかせ、それまで人間に従っていた被造物を反抗させ、人間の敵とした。その結果、人間はけものに等しいものとなり、私からこんなにも遠ざかったため、その創造主のわずかな光すらも残ってはいない。それほどまでに、人間の知識は消し去られ、混乱させられた。

パスカルは、新プラトン主義の円のイメージを彷彿させる「中心」というイメージを付け加えた。彼は、光の隠喩を「消し去られ」という語で強調した。創造時の人間を光に、墮落した人間を闇と盲目にたとえる。

人間には、最初の本性の幸福についての本能がわずかに残っている。しかし、人間は盲目と情欲の悲惨な状態に投げ込まれたため、この盲目と情欲が人間の第2の自然になってしまった。

人間の矛盾する2つの本性、情欲、盲目といった、パスカルの世界観に不可欠のテーマはみなここに入っている。「人間は投げ込まれた」という表現は、深淵のイメージと結びつく墮落のイメージとともに、聖アウグスティヌス直伝の悪い水の譬えを思い起こさせる。アウグスティヌスの3つの情欲よりも、パスカルは高慢—情欲の2項対立を好む。

あなたがたの主な病は、高慢と情欲である。高慢があなたがたを神から引き離し、情欲はあなたがたをこの世に縛りつける。(哲学者たちは)この2つの病のどちらかを残すことしかできなかった。

薬や医者のイメージを呼び起こす病のイメージ¹⁾も、アウグスティヌスの流れを汲むものであり、パスカルの作品にはしばしば登場する。

キリスト教だけが、人間本性の「相矛盾するもの」の問題を解決することができる。あらゆる弁証法がこうして解決されるからではない。キリスト教自体が、信仰と理性の弁証法に基づいているからである。キリスト教は光であると同時に闇でもある。

私は、理由もなく、あなたがたに私を信じさせようとは思わないし、力づくで従わせようとも思わない。また、私はあなたがたにすべ

てを説明しようとも思っていない。

宗教は、理性の証明に属する部分と理性では証明できない部分とからなる。その光の部分、その闇の部分も真理であることをわれわれに保証するのである。依然として、神の知恵が語る。

私は、納得のいく証拠を挙げて、私の神としてのしるしをはっきりあなたがたに見せたいと思う。そうすれば、あなたがたにも、私が何者であるかがわかるであろう。また、あなたがたに否定できない不思議と証拠を示して、自分を権威づけたいと思う。それから、あなたがたに私の教えを信じさせたい。そのとき、あなたがたには、私の教えを拒むいかなる理由も見つからないであろう。あなたがたは、私の教えが現にあるのかないのかを判断できないのだから。

神がはっきり自分の姿を現せば、だれもが納得するであろうが、神は、善良な者と邪悪な者とが分けられるよう、明暗が混合しているほうを好まれた。

ひたすら見ることを願う者には十分な光があり、そうでない者には十分な暗さがある。

この長い断章と弁証論の全体に、明—暗の相反するイメージが出現することが、このテーマの重要性を示している。この世に関するパスカルの世界観の基礎をなす3つの秩序の区別は、光という語がもつ多様な意味に対応する。肉体の秩序においては、それは本来の意味での光である。これは、パスカルにとっては、否定しがたい基礎概念であるように思える。²⁾精神の秩序における光は、知的認識、明証である。それは、デカルトの『省察』における「自然の光」である。デカルトとは違って、パスカルは、しばしば、精神の秩序における人間の認識の限界を表す闇を強調する。愛の秩序においては、それはこの世の闇と対立する超自然的な光である。光のイメージをめぐるこうした

1) パスカルの主要なイメージの問題については、ミッシェル・ルゲルン『パスカル作品におけるイメージ』第3部を参照。Michel Le Guern, *L'image dans l'œuvre de Pascal*, Armand Colin, 1969, 3^e partie.

2) 『幾何学的精神について』参照。 *Reflexions sur la géométrie en générale*.

意味合いは、聖書のテキストにその起源がある。彼がミサの最後に聞いたと思われる『ヨハネによる福音書』のプロローグには、「神は光である」ないしは「神が光を与える」という考え方が延々と展開されている。

この言葉に命があった。この光はひとの命であった。

光は闇のなかに輝いている。そして、闇はこれに勝たなかった。

ここにひとりのひとがあって、神からつかわされていた。その名をヨハネと言った。

このひとは証のために来た。光について証をし、彼によってすべての人が信じるためである。

彼は光ではなく、ただ光について証をするためにきたのである。

すべての人を照らすまことの光があって、世に来た。³⁾

神は邪悪な者の目を見えなくするという考え方は、なんとといっても『イザヤ書』起源である。「救い主なるイスラエルの神、まことに、あなたは隠れています神である。」(XLV, 15) 神は隠れている神である。Deus absconditus、それは聖体の娘のための修道院であるポール・ロワイヤルのスローガンでもある。隠れている神とは、聖体に姿を変えた神のことである。しかし、ジャンセニストにとっては、この表現にはもう1つの意味がある。この神は、神に見放された人間に、神を見えなくさせる神でもある。これは神の義のあらわれである。一方、神の慈愛は、神を知ること、絶えず更新される回心の恩寵でもある光のかたちを取って現れる。、宗教の証明につきまとう不明瞭さ故、特に際だつ、この光と闇との2項対立にパスカルは絶えず立ち帰る。

預言、奇跡、そして、宗教の証拠すらも、完全に説得力があるとはいえない性質のものである。が、一方で、それらを信じることはまったく意味がないと言える性質のものである。それで、ある人たちを照らし、他の人

たちを暗くする、明るさと暗さがある…
(L. 835)

『預言』の綴りにも、これと同じ対立がある。

これから起こることをはっきりと予言でき、見えなくしたり、照らしたりという自分の計画をはっきりと述べ、起こるべき明らかな事柄に暗さを混ぜるひとに対しては、尊敬以外のどんな気持ちを抱くことができようか。

(L. 344)

この光と闇との混淆は、宗教の証明を不可能にするどころか、それ自体が新しい証明となる。パスカルは、『結果の理由』の方法にならない、正から反への反転の手法を用いて、つぎのように書く。

もしこの宗教が、神がはっきり見えるとか、神を余すところなく所有するとか言って自慢するなら、この世には、神をそんなにはっきり顕わすものはひとつもないと言って、この宗教を論破することができるだろう。しかし、そうではなく、この宗教は、人間は神から離れて闇のなかにいる、神は隠れているので、人間の認識ではとらえられない、Deus absconditus (隠れている神) とは、神ご自身が名乗っておられる名前であるというのである。つまり、この宗教は、神は、ご自身を心から捜し求める人たちにはわかるように、教会のなかにそれとわかるしるしを残されたこと、にもかかわらず、そのしるしを覆い隠し、心を尽くして神を求める人たちだけが神を知ることができるという2つのことを両立させようとしているのである。彼らが真理を求めるのに不熱心だと公言しながら、自分たちに真理と認められるものは何もないとわめいたとて、何の役に立つだろう。自分たちは今暗黒にいなながら、教会に文句をつけても、教会の主張する2つのうちのひとつを証明するだけで、もう1つのほうはびくともしないどころか、かえって教義を確固なものにするのである。(L. 427)

3) 『ルーヴァン版聖書』

この光と闇との弁証法によって、パスカルは、弁証論の理性的性格と、理性を超える神の賜物、恩寵と信仰という彼が認めるもっとも大切なものを両立させるのに成功した。

はじめ

分類済み綴りの12番目に『はじめ』という題がついているのは、これが弁証論のいわゆる神学部分の始まりだからである。これ以後は、ただひとつの事柄しか扱わない。学問的で純粹に人間的な考察の出番はない。

コペルニクスの説なら深く探求しなくてもよいと思うが、これはそうではない。

魂が死すべきであるか不死であるかは、一生にかかわる重大事である。(L. 164)

ここには、パスカル独自の思想を貫く前進のテーマが認められる。人間についての学問は自然についての学問にまさり、人間についての学問の上にはさらに神学がある。しかし、パスカルの思想そのものの経緯に、この進歩の原理をそのまま当てはめるべきではない。ジルベルト・パスカルによる伝記からそんな印象を受けるとしても、ただ宗教にのみ関心を注いで、パスカルが学問活動を放棄したと考えてはならない。⁴⁾ ジャック・フォルトンとの神学論争は、1647年1月のことであり、この時期は、ちょうどパスカルが真空の問題に没頭していた頃である。ルーレットあるいはサイクロイドに関する仕事は、『パンセ』執筆時に当たり、ほぼ綴りの分類時期と一致する。パスカルが自分の知的活動のさまざまな領域間に段階をつけていたことは否めないとしても、時間的な切れ目などは存在しない。

これからは弁証論の最後になってはじめて読者に最重要と思われる事柄にだけ注目するよう読者を説得するため、彼は死以外の事柄がいかに無益であるかを述べる。

われわれは、われわれの同類たち、われわれのように悲惨で無力な者たちと一緒になら、安んじていられるとは、おかしなものだ。こんな人たちはわれわれを助けてはくれない。死ぬときはひとりだ。(L. 151)

死は避けがたく、差し迫っているにもかかわらず、人間はそのことを考えようともしない。人間は、自分を待ち受けているものにまるで関心がないかのように生活している。ダイナミックかつ生き生きとしたイメージを散りばめ、パスカルは、読者の無関心を揺さぶり、人間の運命の悲劇的な性格について考えさせようとする。

最後の場面は血みどろなものだ。この劇のその他の場面がすべてうるわしくとも。最後は、頭から土をかけられて、一巻の終わりだ。(L. 165)

人生を劇に例えることは、使い古されたテーマである。パスカルは、エピクテートの作品においても、モンテーニュの作品においてもこれに出会った。しかし、彼らにおいては、このイメージは、死の観念から本来の悲劇的なものを取り去る役目を果たしているのに対し、パスカルにおいては、愚弄とまで言える喜劇化によって、死をより恐るべきものにするのに成功した。これはまた、狂気じみた競走や盲目のイメージと結びついた深淵の比喩が与える印象と同じものである。

われわれは、深淵が見えないように目隠しをしたあと、安心して深淵に飛び込む。(L. 166)

死がさし迫っているということは、リバルタンが考えるのを拒む、あの世がさし迫っていることでもある。

われわれと地獄または天国の間には、この世

4) ヴォルテールは、その著『マイクロメガ』の第1章で、「ユークリッドの命題を50個以上発見したシリアン Strien について、「これは、姉の証言によると、遊びながら32個の命題を発見したというパスカルよりも18個多い。これ以後パスカルは、ごく平凡な幾何学者兼かなり程度の低い形而上学者になった。」と書いている。ヴァレリーもこれと同意見である。

でもっとも壊れやすい中間的な人生があるだけだ。(L. 152)

リベルタンがどう振る舞うべきかを示すために、パスカルは、すでにあの有名な賭の断章と同じように、確率計算の論理を利用する。しかし、論証の形式はずっとシンプルである。ここには、賭博常習者のために、いうなればかの有名な配当金を残しておくといった技術的な性格はない。断章154の手稿を調べてみると、初版を復元することができる。

次のようなさまざまな場合に従って、それぞれ違ったふうに生きるべきである。

1. われわれが永遠にこの世にいられるなら。
2. われわれが永遠にこの世にいられるか
いられないかが不確かなら。
3. 永遠にいられないのは確実だが、長く
いられるのが確実とすれば。
4. 永遠にいられないのは確実だが、長く
いられるかが不確実ならば。
5. 長くいられないのは確実で、一時間
いられるかも不確実ならば。

最終稿では、2つの仮定しか残っていない。

もしこの世に永遠にいられるならば。
もしこの世に長くいられないことが確実で、
一時間いられるかも不確実ならば。
この最後の仮定がわれわれのものである。

ルイ・ラフュマやジャン・メナールのような批評家は、パスカルがここに断章『無限—無』を置くつもりだったと考えている。確かに、この2箇所
のどちらにも、儲けの確率理論が用いられている。しかし、その作用点がまったく違うことを認めるべきである。ここでの問題は、神の存在ではなく、別の断章が示すように、この世で人間が過ごせる時間というもっと限定的な問題である。

一生のうち1週間を差し出さねばならないのなら、百年を差し出すべきである。(L. 159)

パスカルにとっては、読者があの世について考えるのを後回しにさせないことが重要なのである。死が差し迫っているということで、人間は、待たなしに、真理を求めざるを得ない状況に置かれる。神は、明—暗のなかに人間に現れるのであるから、そうするよう努める必要がある。

「確率からして、あなたは真理を探し求める
労を執らねばならない。真理の原則を知らず
に死んだら、損をすることになるからだ。」
「もし神が私にそのことを知らせたいと思っ
ていたのなら、私にもそれとわかるようなし
を残してくださいなさい。」
「神はそうなさったのだ。あなたがそれに気づかなか
ったのだ。だから、探しなさい。そうする
値打ちは十分ある。」(L. 158)

自分の未来の運命に対して人間が無関心なのは論外であることを示すために、パスカルは牢獄にある人間のイメージを提出する。

ひとりの男が牢獄にいて、自分に対する判決
が出たかどうか知らずにいる。それがわかる
まであと一時間しかない。それだけあれば、
判決が出たことを知ってから、それを取り消
させるのに十分である。この時間を判決が出
たかどうか問い合わせるのに用いずに、ピケ
遊びに使うのは邪道である。(L. 163)

この牢獄の人間のイメージは、パスカルの作品においては、人間の悲劇的な状況を表している。囚われの人間のテーマは、宗教文学の常套手段である。おそらく、パウロの奴隷のテーマとプラトン主義に知らず知らずに影響されてのことであろう。しかし、もっとも力強く表現されたのは、パスカルの作品においてなのである。その描写の激しさは、読者の感受性に触れ、生々しい苦悩を伝えることに成功している。

何人かのひとが鎖につながれているとしよ
う。全員死刑を宣告されているが、そのうち
の何人かが毎日他のひとの見ている前で、首
をはねられている。残りの者は自分と同類の

者たちの条件に、自分自身の条件を重ね合わせ、なんの期待も持てず、苦しみながら、互いに見かわしつつ、自分の順番が回ってくるのを待っている。(L. 434)

死が差し迫っているため、人間は神を求めざるを得ない。この観点に立って、人間は三種類に分けられる。

人間には3種類しかない。神を見いだして、神に仕える人たち。神を見いだしていないので、神を熱心に求める人たち。神を見いだしてもいないし、求めようとせず生きていく人たち。1番目の人たちは、理にかなっていて、幸福である。最後の人たちは、どうかして、不幸である。2番目の人たちは、不幸だが理にかなっている。(L. 160)

それで、同じ無神論者とはいっても弁証家の態度が違って来る。「求めている無神論者には同情すること。彼らは十分不幸ではないだろうか。虚勢をはる連中を罵ること。」(L. 156) 自分の無神論を誇り、それに安住する無神論者と戦い、そうでない無神論者たちを手助けするのである。したがって、パスカルにおいては、論争から、無神論者への共感も排除されていない。しかも、弁証家は論争家ではない。言うなれば、弁証家には、自分が戦っている当の誤った考えの持ち主への好意も必要なのである。それで、パスカルはこんなことまで書いている。

無神論は精神の強さのしるしである。ただし、ある程度までは。(L. 157)

理性主義者を自認する無神論者に、彼らの考え方のもろさを見せつけるために、パスカル自身も理性の力を借りる。

無神論者なら、完全に明らかなことを言うべきである。ところで、魂は物質でできているということは完全に明白なことではない。(L. 161)

聖書が教えることと人間の条件とが一致すると述べることは、理性にも適っている。しかし、これには努力と、無神論者が決め込んでいる怠惰とは両立し難い辛抱強い探求が必要である。無神論者は「ちよっと考える」だけで満足する。「それでは十分ではない。詳しく見なければならぬ。哲学の問題ならばそれでもいいが、これに関しては、それではいけない…」(L. 150)

『はじめ』の綴りに出てくるテーマはすべて、はるかに内容豊かな断章のひとつ、ラフユマ版パンセの断章427でふたたび取りあげられ、展開されている。ラフユマによると、断章427の執筆は相当遅く、パスカル思想の最終的な形を示すという。この長い断章の目的は、「この宗教に反対する前に、少なくとも、この宗教がどんなものかを知る」ようにと、リバルタンを説得することである。彼らが考え得る限りの熱心さで真理の探究をおこなったことなら、その態度も納得できる。

彼らが宗教に反対するためには、宗教について知るために、教会の主張もふくめて、それこそあらゆる所を訪ねたが、満足いく答は得られなかったと言うべきであろう。こう言うのなら、彼らは実際に、宗教の言い張ることの一角を崩しているといえよう。しかし、私は、そんなことを言うまともなひとはいないことを証明したいと思う。そんなひとはひとりもいなかったと言いきってもいい。

理性にしか従わないと主張する無神論者に対して、パスカルは、そんなことは理性的ではないと非難する。彼らの行動の源、それは理性ではなく、怠惰であって、このため彼らは必要な探求もしないのである。パスカルがこの怠惰にこだわるのは、彼ら自身がこのことを十分自覚していないからである。

彼らは、数時間、聖書に関する本を読んだり、信仰の真理について、数人の宗教家に質問をただけで、もう大変な努力をしたと思っている。それから、本を読んだり、人にも聞いてみたが、なんにも得るところはな

かったと自慢げに言う。だが、私は彼らに、日頃、私が言っていることを言ってみてやりたい。そんな怠惰は我慢ならない、と。このことは、赤の他人についてのどうでもいいことではなく、われわれ自身、われわれの全体に関係しているのである。

自分たちの利益の核心に直結することへの無神論者たちの無関心に対するパスカルの怒りは、断章全体を通して、中心テーマとなって繰り返される。

自分自身に、自分の永遠性、自分の全体に関係する事柄への彼らの不熱心は彼らの想像以上に私をいらだたせ、驚かせ、不安にさせる。私にはこのようなことは考えられない。

この無関心さは、実際は、たいした影響もないような些細なことを重要視するような人たちに顕著に見受けられる点が、極めて特異である。

命を失うことや、永遠の悲惨に対する脅威に無関心なひとたちがいることは、自然とはいえない。彼らも、その他のことでは、まったく別人になる。この手のひとたちは、まったくくつまらないことを恐れ、そのために備え、それに敏感である。しかも、この同じひとが、職を失ったときや、自分の名誉が傷つけられたと思えば、幾昼夜も怒り狂ったり、絶望に沈んだりするのである。死ねば、すべてを失うことを知っているこの当の本人が、不安も恐怖も感じていないのである。同じ心の中に、この取るに足りないことへの感じやすさともっとも大切なことへの奇妙な鈍感さが一緒に住みついているとは、とんでもないこと *une chose monstrueuse* である。

断章428にも、同じ憤慨が見られる。「こんな風に、無知のままにいるなどとんでもない」無神論者が、怠惰から、もっとも知っているべき大切な真理に対して無知を決め込むのは、彼らとしては当然の態度だといえる。宗教は不可解なドグマを

主張すると言って非難するそのひとのほうが、もっと不可解な行動をする。

この理解し難い不可思議、この超自然的な無気力こそ、このとんでもないことの原因である全能の力のしるしである。(L. 427)

ここにも、神を求めて、必要な努力をしない人たちを見えなくする『隠れている神』のテーマが認められる。パスカルが執着するのは、信仰を持たない人たちの中で、無関心な者と、真理を本心から求めている者とははっきり区別することである。「全精力を注いで真理を求める者とそんなことには手を染めるようとも、考えようもしないで生きている者とは、まったく違うとわたしは思う。」前者について、パスカルはこう書く。「疑問を抱いて、誠実にうめいているひとには、私は同情を禁じ得ない。」一方、後者については、「この人たちについては、まったく違う思いを持つ」と書く。だから、パスカルはこの人たちを軽蔑し、無関心のままに捨てておくことと決めつけることはできない。彼らの態度は軽蔑しても、その人格に対しては、気の毒に思うこともある。

気の毒に思っただけならばならない人たちがいる。しかし、優しさから気の毒に感じるひとと、軽蔑から気の毒に思うひととがあつてしかるべきだ。(L. 432)⁵⁾

この軽蔑から同情への変化は、まさしくキリスト教徒の態度である。「彼らを軽蔑しないために、彼らが軽蔑するこの宗教にとどまるべきである。」(L. 432) リベルタンの無関心は狂気の沙汰であるが、それは「同情に値する」狂気である。こんな具合に、パスカルが示す基本的には好意的な態度に対して、リベルタンの側からも弁証家に対して同じ好意で答えてほしいとパスカルは思っている。

あのひとたちが私の愚かな行為に同情してくれた上に、私の気持ちに反してでも、善意から、この愚かさから引き出してくれれば、私

5) 断章432は、大部分が断章427の準備ノートである。

はこの上なく幸福を感じるであろう。

パスカルは、読者に、読者自身の利益が問題になっていることに気づいてほしいのである。それで、論述が賭の断章のものと似通ってくるのである。

しかし、ここでパスカルが強調する点は、神の存在ではなく、魂の不死性である。

魂の不死性は、われわれにとって極めて重要なことであり、われわれに深く関わることもあるから、それが何であるかに無関心であるとすれば、すべての感覚が麻痺しているにちがいない。

人間の行動はすべてこのことにかかっているはずである。魂が不死か不死でないかによって、人生の意味は違って来る。

パスカルはリベルタンに語らせる。彼に自分の無知、その存在の偶然性と彼を取り巻く宇宙との不釣り合いを告白させたあと、リベルタン自身に、自分の行動にはどこかしら矛盾するところや、首尾一貫しないところがあると言わせる。

せいぜい私が知っていることは、いずれは死ぬということだ。なのに、私が一番知らないのは、この避けようもない死そのものなのだ。

私は、自分がどこから来たのかも、どこへ行くのかも知らない。知っていることといたら、死ねば永久に、あるいは無に、あるいは怒りの神の手に落ちることぐらいだ。このどちらに永遠に振り分けられるかも知らずに。これが、弱く、不安でいっぱい私の現状なのだ。そこで、私はこの先自分に何が起るかなどと考えるのは止めて、残りの人生を送るべきだという結論に達した。

こういうやり方でリベルタンの無関心を描き出すことは、リベルタンをその無関心から引き出すはずの論理的な結論同様、幾分皮肉である。パスカルは、ためらわずに、リベルタンの行動に認められる両立しがたい要素を、驚くべき対句で結びつ

けて、この矛盾を際立たせる。

私は、用心もせず、恐れもなく、かの大いなる事(死)にあえて挑戦し、私の将来の条件の永遠性については不確実なまま、成り行きに従って、死を迎えたいと思う。

「成り行きに従って、死を迎える」という表現から、『ド・サン氏との対話』の中で、パスカルがモンテーニュを批判したことが思い出される。しかし、ここで彼の念頭にあるのは、モンテーニュではなく、学会やサロンあるいはロアンネ侯の取り巻き連中の中で出会ったリベルタンたちである。この連中にはひとつの理想がある。「オネトゥテ(honnêteté)」がそれであって、シュヴァリエ・ド・メレヤダミアン・ミトンらがその理論家であった。しかも、このリベルタンの理想は、キリスト教の理想と正反対ではないのである。この理想は、それが求める限界にまで達しないがゆえに、不十分なだけなのである。パスカルは、もしそこからその限界を取り去ったならば、キリスト教に行き着くことを証明しようとする。「自己は憎むべきものである。ミトン君、君が自己を覆っても、だからといって、取り除いてしまうことまではできない。」(L. 597) 無神論者の無関心に対する長い論述のなかで、パスカルは、リベルタンが友情を重んじることと、他人に彼らを友人にしたいと思わせるように振る舞うことを第一とする道徳律とを高く評価する。リベルタンに自分の支離滅裂な行動を告白させたあと、彼はこう書く。

誰がこんなことをくさくさ言うひとを友人にしたいと思うだろうか。誰がほかのひとたちを差し置いて、こんなひとを友人に選び、自分の重大事を話すだろうか。こんなやつが悲嘆に沈んでいるからといって、誰が駆けつけるだろうか。結局、こんなひとは人生のどんな役に立てるのだろうか。

リベルタンのもうひとつの特徴は、彼らが「感じの良さ」(le bon air)と呼ぶものの追求である。これがキリスト教道徳と相容れない概念であるこ

とをパスカルはよく知っている。「良い感じは他人のことなど気にかけないが、正しい信仰は他人に対する心遣いをする。」(L. 432) にもかかわらず、彼は、リベルタンの無関心と彼らがこれ見よがしに主張する考え方(彼らの大部分は、「優雅な態度」だと思うからこそこんなことを言うのだが)のどちらとも、この感じの良さにふさわしくないことを証明しようとする。

彼らは、こう振る舞うことが世の中で幅を利かせているやり方だと聞きかじった連中である。これが、いうなれば、くびきを振り払うことだと彼らが思い込んでいることであり、努めて真似しようとしていることである。しかし、そんなことをして尊敬を得ようなんて、思い違いも甚だしいということを彼らに理解させるのは、難しくはないだろう。

こんなことは理に適わず、そう言うひとにも、そう言うひとの周囲の人たちにもなんの益ももたらさないばかりでなく、リベルタンが追求する陽気さとも両立しない。

彼らは、自分たちは魂なんて風か煙のごときものにすぎないと思う、それも思い上がった、満足げな調子でそう言えば、それだけでもうわれわれを喜ばせたと言うのであろうか。そんなことは楽しそうに言うべきことだろうか。反対に、この世でもっとも悲しいこととして、悲しそうに言うべきではないのか。

リベルタンの無関心と、死後その身に起こる危険の脅威との間には矛盾があった。その同じ無関心と、彼らが引き合いに出すオネトウテの理想の間にも矛盾がある。「かくもオネトウテに反し、かくも彼らが追求する『感じの良さ』からかけ離れている」ものはない。パスカルは、弁証論のこの部分に彼が割り当てた目標をはっきり述べている。未だ、キリスト教に対する読者の同意を得るには至っていない。これは弁証論の最後の部分の目標である。今のところ、パスカルは読者から、神を求めるとあることを認めるという言葉質

取り付けたところで矛先を収める。

彼らがキリスト教徒になれないのなら、せめて誠実な人間でいてほしい。彼らは、最後には、理性的な人間は二種類しかいないことを認めるべきだ。神を知っているが故に心を尽くして神に仕えるひとと、神を知らないが故に全力で神を求めるひとと。

弁証論の前半は、無関心な人たちを大目に見るのが目的であるが、後半になると、彼らの探求を助ける伝統的な議論を持ち出すことになる。

理性の服従と利用

リベルタンが宗教に反対するのは理性を盾にしてである。理性と宗教との間のしかるべき関係をはっきりさせるために、パスカルはこうした反論を粉砕しようとする。確かに、神の真理へ近づく道筋である権威への服従と、学問にその固有の領域をもつ批判的理性の行使との間には決定的な対立があるように思える。実際には、理性の服従とその利用との間には、はっきり矛盾といえるようなものは存在しない。人間的手段だけでは獲得できない認識に到達するために、権威を持ち出すのは理性そのものである。

理性が最後にできることは、理性を超えるものが無限にあることを認めることである。この認識にまで達しない理性は、ただ弱だけである。

自然的事物が理性を超えているのなら、超自然的事物については、何と言ったらいいのだろう。(L. 188)

懐疑主義、独断論と権威への服従は、実際は矛盾しない。これらは、まったく相互補完的な関係にある3種類の知的態度であって、そのおのおのが固有の領域を持つ。だから、関心の対象次第で、この3つのどれかを採用しても、まったく理性に反しない。

しかるべきところで疑い、しかるべきところ

で断言し、しかるべきところで服従できなければならぬ。しかし、この3つの原理にはずれる人たちがいる。論証を知らないために、すべてを論証可能だと考えるひとや、どこで服従すべきかがわからないのですべてを疑うひと、どこで疑うべきかがわからず、なんにでも服従してしまうひと達がいる。ピュロン派、幾何学者、キリスト者。疑い、確信、服従。(L. 170)

キリスト教はただ服従のみを求めるものではない。キリスト教は、決して理性を排除しない。「理性の服従と利用、ここに真のキリスト教がある。」(L. 167) このキリスト教が求める知的態度に、パスカルは弁証法的な表現を与える。

もしすべてを理性に従わせるなら、われわれの宗教には神秘的なところも超自然的なところもなくなってしまふ。

もし理性の原理に逆らうならば、われわれの宗教は馬鹿馬鹿しくも愚かしいものに成り下がるであろう。(L. 173)

このように、パスカルは2つの正反対の極端に陥らないように勧める。「理性を排除すること。理性にのみ従うこと。」(L. 183) 両極端から等距離にあって、それを保つのがむずかしい中間の姿勢がどんなでものかの説明が次に来る。

真のキリスト者は少ない。私は信仰について言っているのだ。信じる者は多いが、迷信からである。信じない者も多いが、自由思想のゆえである。この中間のひとはほとんどいない。(L. 179)

権威を拒めば自由思想に至り、理性を拒めば迷信に陥る。にもかかわらず、パスカルはこれから始めようとする迷信攻撃そのものに、リベルタンの支持を獲得する方法を見いだした。リベルタンもまた、迷信を秩序立てて攻撃しているからである。

あまりの従順さに、人々を非難しなければな

らないことも稀ではない。

従順は不信仰同様自然な悪徳であって、やはり有害である。

迷信。(L. 187)

信仰と迷信を混同しないように気をつけなければならない。迷信も自由思想同様パスカルの敵である。

信仰は迷信とは異なる。

信仰を迷信になるまで押し進めることは、信仰を台無しにすることである。

命題全部を信じるという迷信等々。(L. 181)

ここで、しばらくの間、パスカルは、別の戦いについて述べるために、リベルタンを追いつめて彼らの陣地に踏み込むのを控える。それは、『プロヴァンシャル』やジェズイットに対するほかの論争文書で、同友のジャンセニストのためにおこなった論争である。ジェズイットらは、彼らがジャンセニストの誤りを要約したと考えた五つの命題が、教皇から有罪宣告されただけでは飽きたらず、これらの命題が実際にジャンセニウスの著作中にあると信じさせようとした。ところで、ここが大事なポイントである。命題が書物に含まれているかいないかを知ることは、批判的理性に属するもので、権威への服従に属するものではない。権威を持ち出すことは正しくない。「あなたがたは人々が教会に対して抱いている信仰につけ込み、彼らを騙す。」(L. 186)

真のキリスト教は、権威に服従するときでさえ、理性に適っていなければならない。この服従そのものが、言ってみれば、理性、特に理性が自分自身の持つ障害に対して抱く意識が命じるものだからである。

聖アウグスティヌス。理性は、自分が服従しなければならない理由があると判断しなければ、決して服従しないであろう。

だから、理性が服従すべきだと判断して服従するのは正しい。(L. 174)

これは、実際、ジャンセニスト達の間でおそらく高く評価されていた聖アウグスティヌスの考え方である。これが『ポール・ロワイヤル論理学』にも採用されているからである。「あることをわれわれに信じさせる一般的な2つの道、理性と信仰を比べてみると、信仰は常に理性を前提としていることは確かである。というのは、聖アウグスティヌスが書簡122やその他のところで述べているように、未だ理解できないにせよ、理性自身がこれは信じられると納得しない限り、われわれには、自分の理性を超えることは信じられないであろう。」(第4部、12章) 認識の基礎を啓示の権威と理性の行使に限ることで、パスカルは、多くの議論を普遍的な同意に基づかせるキリスト教弁証論の伝統とは、ある意味で対立する。ここでは正しい価値を持たない論証方法が問題であるとパスカルは見抜いていた。

反論は真理の良くないしるしである。
 多くの確実な事柄が反論される。
 多くの誤りが反論なしに通る。
 反論は誤りのしるしではなく、反論されないことも真理のしるしではない。(L. 177)

事実、この普遍的同意の議論は、どうにでも扱うことができるため、何らかの誤りを支持するために用いることもできるのである。ここには、真空の嫌悪に関して満場一致の支持を得た理論がいかにも誤ったものであったかを証明した学者の心意気が感じられる。それ故、学者の批判精神とキリスト教作家のいわゆる素朴さとを対立するものと捉えないようにしましょう。

普遍的同意は、真理とともに誤謬をも立てることができる。
 真理を好ましく思わない人たちは、異論のあることや真理を否定するひとが多いことを口実にする。だから、こうした人たちの誤りは、自分たちが真理や愛を好ましく思わないことからこそ生じるのである。彼らはこのことでは言い訳できない。(L. 176)

強制もまた宗教を精神や心に置くためにはなんの

力もない。意識に働きかけるために力を利用しようとする圧制を拒否することで、パスカルは聖アウグスティヌスに対立する。

すべてのことを穏やかになさる神様なら、宗教を、理性を通して精神に、恩寵を通して心に置かれるであろう。しかし、力や脅しによって精神や心に置こうすることは、そこに宗教ではなく恐怖を植え付けることになる。「信仰よりも恐怖を」(L. 172)

ここではパスカルは、宗教を維持するために強権を発動することを正当化しようとする聖アウグスティヌスの『ウィンケンチヌスへの手紙』を念頭に置いている。パスカルがこの箇所をナントの勅令廃止以前に書いたことを思えば、この点に関するかれの考え方が並外れて現代的であることを認めるべきである。

キリスト教が啓示への服従と理性の使用の2つともに基づくのは、この2つの態度は実際には矛盾していないからである。「信仰は感覚が言わないことを語る。が、感覚が見るものと反対のことは語らない。信仰は(感覚を)超えてはいるが、(感覚に)反するものではない。」(L. 185) したがって、批判的理性を働かせれば、啓示の内容にいくつか確信が得られる。こうして、キリスト教の超自然的性格とキリスト教を生み、初期の発展を支えた奇跡の超自然的性格は一致する。それ故、奇跡を認めることから教義の正しさを引き出すことは道理に適っている。ここでまたパスカルは聖アウグスティヌスに戻る。「奇跡がなければ、私はキリスト教徒にはならなかったであろう。」(L. 169)

『パンセ』には、奇跡の問題に関わる考察は数多いが、その大部分は弁証論とは別の目的で書かれた。『プロヴァンシアル』の最後の部分の執筆に力を注いでいたとき、パスカルは聖茨の奇跡に関する論争に積極的に関与しようとも考えていた。この奇跡の恩恵を受けたのは、彼の姪のマルグリット・ペリエだったので、パスカルは自分に直接関係があると感じたのである。この論争のために、写本では『奇跡』という題のシリーズに集められた断章が作成されたのである。ポール・ロ

ワイヤルの同志達にとっては、奇跡は、自分たちが擁護する教義の正しさを明らかにするため、神から与えられたしるしであった。反対に、ジェズイットにとっては、ジャンセニストをその誤謬から引き離すために、神がこの奇跡をなされたのである。パスカルは、あいまいで、真理がどこにあるかを知りうる他の指標がない場合には、奇跡の介入は、真理がどちらの側にあるかを示して、このあいまいさを除去するよりほかの意味はあり得ないことを証明しようとする。

もし、初めから、パスカルの奇跡に関する考察が、彼がその証人であり、被恩恵者でもあるこの奇跡だけを扱っていたなら、パスカルは奇跡の説得的な価値についての一般的な問題をもっと早くに提起したであろうことは間違いない。このことは、当時、論争的視点から弁証論的視点へとかれを移行させた視点の変化によって明らかにされる。ジルベルト・パスカルは、弁証論の始まりを聖茨の奇跡に対する弟の行動に認める。他方、一連の奇跡に関する箇所には、題名にふさわしい考察と『プロヴァンシアル』論争に関するノートと並んで、弁証論のいくつかの大きなテーマの構想となる一連の発言が含まれていることが確かめられる。それ故、当然、弁証論に関するノートのなかにも奇跡に関する考察が見いだされる。

とはいえ、奇跡論の重みは、弁証論の展開においては極端に縮小されていることに注目しておくべきであろう。弁証論の伝統においては、奇跡論は預言論と同じ地平で論じられるが、パスカルは奇跡を厳密な意味でのキリスト教の証拠、言うなれば、内在的な証拠には数えない。奇跡については、正当な証拠を提示するための準備段階で触れるにすぎない。分類済み綴りに属する奇跡に関するノートが『理性の服従と利用』の綴りに入れていることから、パスカルがこのテーマに与

えた価値がわかる。奇跡は自然的秩序には属さないゆえ、純粹に理性的な説明の可能性を超えている。したがって、奇跡は、理性に自分の限界を知り、ある種の認識は理性を超えることをいやでも認めさせる。パスカルの議論における奇跡の役割は極めて限られている。それは、人間が奇跡の存在によって証明される、理性を超える真理に到達できるように、理性に啓示の権威への服従を受け入れさせる役を果たすにすぎない。それはおそらく、聖茨の奇跡に関する論争から、パスカルはいかに奇跡の解釈が困難であるかを知って、その弁証論への利用を縮小したためであろう。奇跡論に割り当てられたこの役割の独創性は、パスカルがこの領域において、ユゴー・ド・グロート (Hugo de Groot) が奇跡と預言を同じ地平で論じた『キリスト教の真理について』からヒントを得ていることから、特に顕著である。⁶⁾

だからといって、パスカルにとって、奇跡は何の説得力もないと結論づけてはなるまい。たとえ彼の時代には、奇跡が信仰に導く決定的な議論とはならなかったにせよ、ずっとそうだったわけではない。「奇跡がなかったならば、キリストが信じられなくても、誰も罪を犯すことにはならなかったであろう。」(L. 184) しかも、奇跡が決定的な証拠となったのは、ただキリストの生きた時代ばかりではなく、原始キリスト教の発展期全期を通してそうだったのである。

イエス・キリストは奇跡をなされた。そのあと使徒たちも、また多くの聖人たちも。預言はまだ成就しておらず、成就しつつあったため、奇跡以外に証拠となるものがなかったからである。メシアが全国民を改宗させるとの予言がなされていた。国民の改宗なしに、どうしてこの予言が成就されるであろうか？

6) パスカルのヒントを得たユゴー・ド・グロートのテキストを次に掲げる。「今日ではもう奇跡や予言について耳にすることはないと反論するひとに対して、私はこう答えよう。摂理の正しさを証明するには、かつてそれらが起こったことだけで十分である。しかも摂理は実際に存在するとの真理が一旦確立したからには、このような事柄がもう起こらなくなっても、驚くことはない。なぜなら、宇宙を総べる神が存在するのであれば、神がかつてこうした超自然的手段を実行した場合と同様に、今日ではもう実行しないことにも相当の理由があると考えるべきである…地球の片隅でのみ神の正しい礼拝が行われ、そのことがすべてのひとに知られていない場合、あるいは神のご計画通りに、キリスト教が全世界に広められねばならなかった場合、不品行や偶像崇拜の氾濫を食い止めるため、何回かクーデターを起こし、キリスト教を確固たるものにする以外に適正な方法はなかったのである。」(ルジョヌ師訳『キリスト教の真理について』 *Traité de la vérité de la religion chrétienne, I*, 18.)

メシアを証明する預言がなければ、どうして国民はメシアに改宗するであろうか。メシアが死に、復活し、国民を改宗させる前に、すべてが成就していなかったのであるから、この間ずっと奇跡が必要だったのである。いまでは、ユダヤ人に対しては、もはや預言は必要ない。成就した預言は永続的な奇跡にほかならないからである。(L. 180) (続く)*****

*****本訳稿はまず、古家曜子が作成し、次いで、本誌、他の翻訳と表記の整合のため、森川 甫が加筆、修正した。